

保育者・教育者の為の身体レッスン —しなやかな身体と共鳴する身体を取り戻す実践的研究—

渡辺 行野*・木村 学*・日名子 孝三*

本研究は、保育者・教育者に求められる身体技法をどのように習得できるのか、その授業デザインを提示することが目的である。試験的な授業実践として2回に渡り6つの身体レッスンを企画した。調査観点として「しなやかな身体」と「共鳴する身体」という2つの観点を基にレッスンを実施し、その際の受講者の活動の様子について分析を行った。その結果、授業実施のフィールドの特性に応じて、どのような教材を利用し、協同性を生成することができるのかが重要であるという示唆を得ることができた。

Key words：身体，芸術，環境

1. はじめに

小学校の学級活動や、幼稚園・保育所の一斉活動の場面等で、しっかりと子どもたちの視線を集め集団の凝集性のもと対話が継続する実践者に出会うことがある。一方で、集団が拡散してしまい対話が成立していない実践者に出会うこともある。この両者の違いは何なのだろうか。おそらく言語運用スキルの違いもあるかもしれないが、そこにはより統合されたコミュニケーションスキルとしての実践者の身体的な振る舞いに違いがあると考えられる。本稿では、保育者・教育者に求められる身体的な振る舞いをどのように習得できるのか、その授業デザインを提示することが目的である。

保育者・教育者は、現場において多種多様なスキルが求められることになる。目の前の子どもたちとの関わりはもちろんのこと、保護者対応や放課後の記録の作成等を日々行わなければならない。その他にも教育・保育を実践するうえで、自

然科学の知識や生活文化の知識も必要とされる。例えば、ひな祭りや七夕、季節に応じた遊びなどを指導することになるが、それら実践の前提としては五節句や二十四節気等との関連を理解していなければならない。これらの知識については教員養成・保育者養成のカリキュラムとして学習することであるが、単に知識を身に付けるだけでなく、実践的な知識・技能として身につけ、行動できなければならない。例えば多くの保育現場で、サツマイモ掘りなどの活動を行ったりするが、そのためにはサツマイモの苗の植え付け時期や、天候を見ながら掘りおこす時期を確定しなければならないし、調理方法も知らなければならない。野外で焼き芋をする場合は、落ち葉を集めたり、マッチを擦り点火しなければならない。さらには消防署への届出や消化用の水も用意しなければならない。つまり、このように一つの活動を遂行するまでの総合的な実践知が求められることになるわけであるが、土を掘り起こす深さや、マッチを擦る角度や強弱、落ち葉の乾燥具合の見極め等は、全て経験的に習得すべき身体技法なのである。それ

*人間学部児童発達学科

では、こうした一連の活動を実践するための身体技法を習得するには、教育者・保育者養成においてどのような授業デザインが求められるのであろうか。

2. 体験活動の意義

前述のような身体技法を習得するうえで体験的な学習が重要になることは言うまでもない。体験活動の重要性については、文部科学省においても「生きる力」の育成というキーワードとともに、これまでも指摘されてきていることである。一方でPISA調査における学力調査においては、学力の在り方そのものが問われることになったが、調査結果の低下に対して授業時間数増や、さらなる競争原理を持ち込もうとする主張も見られ、体験学習への批判も見られるのが現状である。実際に、2008年の学習指導要領改訂において「総合的な学習の時間」の時間数は減少している。さらに2016年の中央教育審議会による次期学習指導要領の答申では、「主体的・対話的で深い学び」という教育改革が示されたものの、授業改善の実現には授業を担う人材育成に期待しなければならないだろう。

そこで、PISA調査の結果上位国のフィンランドなどの教育スタイルを見ると、総合的学習で行われるようなプロジェクト学習や協同学習が重要な役割を果たしていることが分かる（教育科学研究会編2005）。日本の小学校の事例でも、例えば市内の小中学校に、社会貢献として課題解決のプロジェクトを企画・申請してもらい助成金を出している事例があり、プロジェクトの例としては、「野菜を栽培して独居老人宅に配布する」という取り組みなどがあるという（市川2009）。

こうした教育現場の動向に呼応するように教員養成・保育者養成においても体験学習の手法を用いたカリキュラムが組まれるようになってきた。さらに実践的な技能の育成やチーム医療の育成などにおいては、Project-Based Learning（PBL）と呼ばれる課題解決型の横断的なカリキュラムが試みられている。例えば、東京学芸大学では他学部の学生同士によるプロジェクト学習を複数年にま

たがる授業構成として実践している。そのプロジェクトの一つには「子どもの遊び場づくり」がある。このプロジェクトでは、遊び理論を座学で学びつつ、実際に子どもたちに遊びを提供するという企画・運営を学生主体で行っている（地域と連携する大学教育研究会編2012）。同じく京都女子大学のように、「自然体験演習」という授業を通して、継続的な飼育・栽培などを学生に経験させるという授業デザインも見られる（宮野2009）。

さらに学生同士のコミュニケーション能力の育成を目指した実践として、劇作家の平田オリザは、大阪大学の大学院全研究科を対象に演劇を創る授業を行っている（平田2012）。例えば、看護学科の学生たちによる「癌告知に関する劇」では、医療コミュニケーションが求められる現在において、教育的効果が高い実践であったという。安永もコミュニケーション重視の協同学習の一つであるラーニング・スルー・ディスカッションという学習法を大学の講義で実践している（安永2009）。この授業では、読書課題の理解を深めたり、話し合いを学生が肯定的に捉えるようになり、仲間関係が改善するという。それでは教員養成・保育者養成においては、どのような経験が必要なのだろうか。小川は、保育者を目指す若い世代の中に、遊び体験や労働体験の欠落、対人関係の未熟さを挙げ、その要因として仕事を通しての自然との交わり等が欠落したことに要因があるという。そこで保育者養成カリキュラムの中に農業体験やモノづくり、料理づくりなどの経験が必要だという（小川2013）。

3. 教育者・保育者に求められる身体技法

ここまで身体技法の重要さとそのための体験活動の意義について述べてきた。つぎに教育・保育において、どのような身体技法が求められるのか検討しておこう。まず現代社会において、モータリゼーションの拡大による歩行の減少や、電子家電などの道具使用の増大に伴う生産過程の簡略化に伴う生活スタイルの変化の結果、子どもたちの行動範囲や遊び範囲も時代と共に変化してきたと

考えられる。自然の中で遊ぶ機会や、異年齢集団で遊ぶ機会の減少は、自らの身体で他者と協同して身の回りの環境に関わる機会の喪失につながっており、必然的に身体技法の獲得が十分になされていないと想像できる。こうした問題は、戦後の高度経済成長の時期から指摘されてきたことであり、教育学者の国分によれば、子どもの生活スタイルの変化によって、「あそび」、「かせぎ」、「用」、「かざり」がなくなったという（国分 1973）。昔の子どもたちの生活には、子どもたち同士の遊びやお手伝いの文化があり、それらの行為を効率よく行うために道具をつくりだしたり、飾りを施したりしたのだという。例えば、手作りの木刀の柄の部分の表皮を剥いたり残したりして精細なイチマツ模様をつくるのだという。そしてこうした子どもたちの行為には、身体の「しなやかさ」という身体技法が身に付いていたのであり、しなやかな身体は美意識を育むことに繋がったのだという。つまり、身体技法の習得のための身体教育とは、美意識を育むための感性教育に繋がるのである。このような感性教育とは、身体教育が単に体育という教科に分化されたものではなく、近代教育制度を問い直すためのあらゆる教育の基底になるべきものだという（樋口 2005）。

私たち人間は、これまでもポラニーの「暗黙知」やブルデューの「ハビ투스」概念に見られるように、日常生活の中で様々な身体技法を習得しているわけであるが、身体技法の習得によって、身体が存在する世界そのものとの関係が変化すると考えられる。例えば、自転車に乗れるようになった子どもは、これまでの生活範囲がより広くなりできる活動も増えるわけであり、その子どもの生活世界は一変する。倉島は、身体技法の習得のプロセスにおいて「威光模倣」という概念を用い、その特徴として以下のように述べている（倉島 2007）。模倣者が行為の実際の有効性をまったく顧みることのないまま盲目的に模倣するのではなく、社会的な信頼や権威に還元されない有効性が認められたときにのみ、行為は威光模倣の対象となるのだという。つまり「威光模倣」とは、「威光」を帯びた模倣対象者によって目の前で行われた行為が「成功」したために、その行為の形

式を模倣すべきものとして認識した模倣者が、同じ形式を身に付けるべく意識的に開始する「模倣行為」なのだという。例えば、筆者の身体技法習得の経験として、スキー技術の習得を例に考察してみたい。スキー技術という身体技法とは、いかにして雪の斜面を効率的に早く滑降するかという技である。しかし、この技の習得は実に難しいことである。なぜなら日常生活のような平らな場所ではなく、常に傾斜のある凹凸のある斜面に立ちながらスキー板を操作しなければならないからである。そこでは落下する速度に自分の身体を合わせていかなければならないし、ターンする遠心力に対しても身体の左右のバランスを保たなければいけないのである。しかも同時に、滑降の加速を得るためには、ターン毎に足元でスキー板をさせるためのパワーを生み出すことが必要とされる。従って、スキー指導の際には、身体の使い方についての様々な擬態語や、わざ言語が用いられることになる。例えば、「ギューっと力を入れる」、「フワッと力を抜く」等という表現がしばしば用いられる。ある指導者は日本でもトップレベルの現役選手であったが、「背中でパワーを伝えるように滑る」という耳慣れない表現をしたことがある。パワーを伝えるのは、スキー板に直結する足元の土踏まずや、足首を曲げる操作によってであり、背中でパワーを伝えることはできないはずである。筆者が後から気付いたことであるが、直接的に背筋に力を加えるということの意味していたのではなく、そうすることで身体を縮こめることなく安定して足元にパワーを蓄えることができるということの意味していたのである。筆者がその技の有効性に気づくことができたのは、耳慣れない表現をしたユニークな指導者にある種の威光を感じ取ったことと、それに伴って指導者の手本の滑りをよく観察したこと、そして自分の滑りのポジションを変化させることができ、以前よりも転倒することが減少し安定してターンすることができたためである。つまりこのように身体技法の指導の際に重要なことは、学習者の側で、自身の身体的なかかわりの変化を自覚することである。例えば野外体験学習の場面であれば、自然観察の際に今まで以上に広範囲に観察の目を向けることが

できるようになったり、生き物や草花を傷つけることなく採集できるようになること等を、学習者側で自覚できることである。そこで指導者には、体験学習の場面であれば学習者自身の体験による変化について、学習者に自覚化するための契機を与えることが求められるのであり、さらには活動のモデルを示すことが重要になる。

ここで具体的な教育者・保育者の例を基に、身体的な振る舞いについて考察してみよう。その為にまずコミュニケーションにおける「声」に注目してみたい。青木は声の特徴について以下のように述べている（青木 2013）。声は、身体器官の巧みな運動によるきわめて微妙な息の制御と振動バリエーションによって発話を実現している。つまり身体の働きとして実現され、他者の身体へ届く。例えば痛みを伝える場合などは、叫びや呻きなどの原初的なふるまいが併存することがある。声を捉える枠組みとして、身体の動きである「声の身ぶり」と、身体の状態としての「声の身構え」という概念がある。例えば、ジェンダー、世代、相対的年齢、社会的地位、場、状況などは固有の「声の身構え」を生じさせることになる。一方で、一回一回の発話を取りあげると「声の身ぶり」とみなせる。現実には、身ぶりと身構えは、同時に身体において実現されるため融合しており、他者との関係のなかで実現されるという。

以上のように発話分析においては、発話をテキストとして記号表記し分析していくなかで、「声の力」は分析の圏外に置かれることが多いだろう。しかし、発話においては「声の力」が大きな働きをしていることは確かであり、上述の視点は大変興味深い。例えば日本語の場合であれば、東北弁のようなズーズー弁でゆったりと会話するような「声の力」と、大阪弁の女性が機関銃のように話し続けるような「声の力」があるかもしれない。あるいは、社会的地位という観点から考えれば、教員や保育士には独特の「声の力」があり、弁護士や裁判官にも独特の「声の力」があると考えられる。

そこで、ある男性の幼稚園教諭 A の声について紹介したい。A 教諭の声を取り上げる理由は、これまで筆者が観察してきた中で、日頃から低い

声でゆったりと話す姿が魅力的に映ったからであり、おそらく子どもたちにも、その「声の力」が大きく影響しているのではないかと考えるためである。例えば、まず集りの際に話を始める時は、子ども用のイスを持ち出して、静かに座って子どもたちが集まってくるのを待っている。同時に子どもたちのほうも、先生がイスに座ったら何か話が始まるということを知っているのである。そしてタイミングを見計らって、「ねえ、みんな…、今日はね…」と静かに、そして時にはヒソヒソ声で秘密めいた話し方で語り始めることもある。この時、聴く側の子どもたちは、これから始まる A 教諭の話に集中しており、安定した相互関係が築かれていくのである。このような相互関係の基に、子どもたちの様々な活動が展開されていくわけである。つまり A 教諭の「声の力」によって、子どもたちは引き寄せられ、子どもたち同士の活動の方向性が導かれていくのであり、これらは、いわば A 教諭によって毎朝行われる儀礼と解釈できるだろう。儀礼のリーダーである A 教諭の「声の力」を起点にして、日々の活動が展開され、子どもたちも園生活を通して A 教諭の身体技法を習得していくと考えられる。そしてそこで習得された身体技法は、他者との共鳴する身体をも形成していくと考えられる。例えば、A 教諭のクラスでは、大型の製作物を協同でつくりあげる活動が多い。その際、トンカチやノコギリなどの道具を使用するが、道具を持たない子どもたちは、作業する子どもたちのサポートの為に、自然と作業しやすいように木材の一方の端を手で押さえたりするのである。これは子どもたちの間に共通の身体技法が確保されているためであり、身体レベルで共鳴する関係が構築されているためである。

以上の考察を踏まえ、本研究では、「しなやかな身体」と「共鳴する身体」の獲得を目的とした教員養成・保育者養成の授業デザインを試みる。

4. 研究手続き

1) 調査観点

前述の通り、調査観点として「しなやかな身体」と、「共鳴する身体」を獲得するために、養成カ

リキュラムの中で、どのような授業デザインが可能となるのか検討する。そこで実際の授業実践として、音楽教育、美術教育、環境教育の3つの領域を統合した横断型の授業デザインを試みる。本研究では、演出家で教育学者の竹内敏晴によって教師たちが自分の「からだ」と「ことば」を取り戻した「レッスン」に倣い、「身体レッスン」という用語を用いることとする（竹内1999）。授業づくりをするにあたり、調査年度に取り組む領域を「環境・音楽・図工」とし、各領域の担当者同士で打ち合わせを重ねた。領域を超えた授業づくりとして、内容・目的・実践の方向性について立案していき、企画した授業実践を行った。また、授業実践をもとに、その内容を所属する学科全体で検証し、学科のカリキュラムマップと授業実践および学生の姿を比較・検討しながら議論を深めた。それぞれの領域の特性を互いに共有し、領域を超えた学びのつながりとカリキュラムマップの関連付けについて議論を重ね、今後の学科の方向性についても多くの知見を得た。

授業づくりに向けて、授業者の中で話題に上がった内容は「最近の学生は、身体が固くなっているのではないか」、「大人になるにつれて身体は自然に固くなっていくのかも知れないが、教育現場で活躍していく学生たちには、感性が豊かな身体であってほしい」、「教員養成として、どのような力をつけていくべきか」というものであった。以上の議論を踏まえ、①狭い概念の固まりや狭い考え方という捉え方を解きほぐし、多角的な考え方や感じ方ができること、②形のないものや目に見えないものを身体で感じ取り、それらを表現できることという視点を基に、学生の身体が変化していく授業づくりを目指すことになった。そこで本研究では、「しなやかな身体」を「手先のしなやかさと環境を柔軟に認識し表現できる身体」、「共鳴する身体」を「他者の身体を感受し他者の身体と同調する身体」と定義する。

授業実践では、「感じる」ことや感覚を使って学んでいく過程を大事にすること、身体の協働作業や身体の響き合い、自然のものを自然のままに感じることを、身体感覚を取り戻すことを意識するように組み立てることとした。受講者に提示した

レッスンのテーマは、「しなやかな身体と共鳴する身体を取り戻す授業デザイン」と設定した。

2) 調査方法

前述の3つの領域を担当する教員が共同で授業を行った。参加した学生には、このレッスンと調査研究の関係を説明し、データを使用することを説明し全員から承諾を得た。データ収集は以下のような手順で行った。①グループごとに活動をビデオカメラで記録する。②協同で作業している場面の会話や表情に焦点を当てる。③活動の後にグループごとに集団でインタビューを行い、表情とともに音声をビデオカメラで記録する。

3) 音楽教育の視点からの教材観

現代社会には、多くの音が存在し、音が溢れている。聴こうとしないと聴こえない音が増えてきているのではないか。また、聴く（聴覚）ということと相互に作用している「五感」そのものが鈍くなっているのではないだろうか。環境音や自然音と、人間の関わり方とはそもそもどのようなものか。音楽とは、色々な視点から考えると幅広い意味を持っているが、ここでは、人と音楽の繋がりを音・音楽が生まれる原点を意識していくことを取り入れたい。また、五感を使った身体、しなやかな身体を求めていくとき、全ての研ぎ澄まされた五感が重要になってくると考える。

音や音楽のこれまでの歴史には、色々な説があるが、音や音楽は、合図を伝える手段であったり、喜怒哀楽の感情を表したり、異性を惹きつける手段であった。また、踊り、祭り、儀式、祈りの手段としても用いられていた。鳥や動物の鳴き声を真似たり、自然の音を再現して祈りを捧げたり、声は勿論のこと、身の回りの道具を楽器として使っていた。人と音楽との関係は、深い部分で相互関係を結んでいたのである。また、自分自身が発している音（勿論声も含めて）も、自分の思いを表しており、「音」は、伝達・コミュニケーション・情報の一つといえる。

山田（2008）は「音は、身体から発せられる、そして、身体へと浸透していく。」そして、「音は、身体に潜在する響きとなり、身体を様々な場所や

時間に適応させる。」と述べている。音を生み出すこと、関わること、そして聴くこと、それらは全て身体を通して行われる。つまり、山田のいう「音響的身体」であると考えられる。更に、「森に生活するボサビの人々は、目には見えない多くの物を耳でとらえる。」、「聴くことや声に出すことを通してみずからの位置を確かめている（中略）自分の居場所を知るための鋭い聴覚を発達させている。」、「視覚からえられている情報をはるかにしのいでいる。森の中の存在は、視覚的に隠れているときでも音でわかる。」と、聴覚の重要性を主張している（山田 2008）。

今回の身体性を考えたとき、まずは音の原点を、声の重なりやその空間の感覚、サウンドスケープを通して感じられることが重要である。また、たき火の香りや匂い、音の空間から、感覚を研ぎ澄ましていくことが求められる。実践においては、聴覚をはじめとした「五感」を生かした言語的、音楽的、表現芸術的な活動を網羅したプロセスを取り入れている。

サウンドスケープやたき火の実践では、自然の中に自らが存在しており、その空間には様々な音が重なっている。そして、研ぎ澄まされた身体により音への感覚が冴えてくる。モノや他者と関わり、コミュニケーションをとり、身近な音を探し、身体で感じていく。その空間を身体で表現していくことで、聴覚的・運動的・身体的な感覚と共に時間と空間を共有できる身体が育まれていくであろう。これこそが、山田のいう「身体的な知識、身体技法」であり、本実践を通して「音響的身体」へと発展していくことをねらいとしている。

4) 美術教育の視点からの教材観

保育者・教育者は現場において多角度からの実践を行う能力を必要とされるが、若い保育者・教育者においては子どもたちと同様にある部分が欠けている可能性があるのではないかと考えられる。近県における開発による自然の減少や都市部の整理された環境によって、子ども、大人、関係なく視覚・体感という面からみても体内に蓄積される自然感覚が減少しているのではないだろうか。こうした状況で指導的立場になったとき、子

どもたちに与える示唆の範囲が狭まってしまうのではないかと考えたのが本授業を行う基となっている。本研究は、物事から受ける様々な現象や体験を通してそれぞれの学生の感覚に刺激を与え、それぞれに固有の表現を展開してもらう試験的な実践である。

フロッタージュは造形の授業カリキュラムにも取り入れているもので、分野的には版画の領域になる。凹凸のある物、場所であれば子どもの印刷にも簡単に導入しやすい内容であるため、造形の授業では生きることから毎年行っているものである。この授業に参加した学生ほぼ全員が体験済みである。授業では、基本として導入しているが造形における基本作業と考えている。本来の授業目的としては学んだ作業方法をいかに自分の得た感覚に従い応用していくことができるかがポイントである。技術はあくまでも自分の得た感覚を具体化するための方法の一つにすぎない。今回の授業で、参加学生それぞれが得た感覚を造形に転化できることをねらいとする。

5) 環境教育の視点からの教材観

日本のものづくりの技術と伝統において、古来より木材の利用が盛んに行われてきた。家屋の建築にはじまり、生活全般や身近な道具作りなどにも木材は利用されてきた。子どもたちも、生活や遊びのなかで木材を利用する機会がしばしばあっただろう。例えば、調理やお風呂を沸かす際のかまどに用いる薪を集めるのは、多くの場合子どもの役割であったし、勉強に使う鉛筆も小刀で削りだしたのである。遊びの場面では、コマをつくったり、ネッキという遊びでは木を削りだしオリジナルのものを作成して遊んだのである。しかし、近年、輸入木材への依存率が高く森林の荒廃が問題となっている。環境教育の観点からも、木材の利用と森林の循環的な活用について学習することが求められる。さらに木材に接する機会の減少は、子どもたちが、身近な道具を、身近な木材を利用して、自らの力で作成することの減少につながっている。それによって子どもたちの多くは、身体のしなやかさを喪失していると考えられる。

上記の問題背景のもと、木琴づくりの学習を体

験的に行うことにする。木の性質として、材質や密度が多様であり、これらの特徴を生かして木琴を作成することで、木の特徴を理解する。ノコギリという道具の使用や麻縄の利用を通して、身体、特に手先のしなやかさを身に付ける。さらに重い木材を運んだり、切ったりする際には、他者との協同作業も求められる。例えば、木を切る側と、木を抑える側がお互いの力をかける度合いを調整しなければならない。これらの経験を通して、他者と身体のリズムを合わせる重要さに気付いていくことをねらいとする。

5. 結果と考察

1) 「環境・音楽・図工」領域の身体レッスン①

表1 身体レッスン①の概要

実施日	2016年7月25日(月)1限～3限
対象	通常行われている授業カリキュラムと異なるので、学部生3年生を中心に各ゼミ生を集めて行う。木村ゼミ：8人、渡辺ゼミ：15人、日名子ゼミ：1名=合計24名
場所	大学のテニスコート付近の森(1限、2限)、美術室(3限)
ねらい	身体で環境を感じ取ることができる。「風・雨・空気・音・光」など、見ようとしないと見えないものを捉え、それらを表現することができる。
流れ	環境：「木琴づくり」木の性質、道具を準備、材料集め、組み立て、演奏(グループごと) 音楽：「音の風景と表現」サウンドスケープ、音を絵や言葉・デザインで描く、空間を感じる(触る・浸る)、ストーリー化、イメージの音を探す、グループでつくる(創作)、発表。 図工：「感じたものを描く」具体的なものを描くのではなく、感じたもの(午前中の空間・音・匂い・光)を描く。

「木琴づくり」では、①諸注意として森での注意点を説明し、安全対策を行った。②木の性質についての説明では、楽器作りに適した材料について示した。③道具を準備、材料集めでは、長さ50センチ×直径6センチくらいの木を8本(音階)、長さ100センチ×直径8センチくらいの木を2本(土台)、長さ40センチ×直径4センチく

らいの木を2本(バチ)を森から探し始める。④組み立てる。協力して作業を進めるように促した。⑤演奏練習、演奏披露の流れで活動を進めた。

枝を探してくる、ノコギリを扱うなどの活動が始まると、最初は一人ひとりで行っていた作業も、徐々に他者と共に協力し合いながら作業が進んでいく。木琴をつくるまでのさまざまな経験を通して、他者とサポートし合う姿があった。また、「ノコギリを使うこと」によって、切る人、押さえる人など、他者との関わりが生まれることとなった。音階になるかどうか音を鳴らしながら、仲間と確認し合い、グループで協力し合う姿が見られた。その様々な一つひとつの動作によって身体の使い方を変化させたり、木を揃えて音階を探り合ったりしていく様子からは、お互いの身体感覚が同調していく姿と解釈できる。



図1 木を切る作業



図2 木を音階にそろえる作業

「音の風景と表現」では、①サウンドスケープを行った。静かな森の中で、耳を澄まし始める



図3 音の風景を表現する作業

と「セミの声も色々な種類がある」、「普段感じ取れなかった音が沢山聴こえてくる」、「五感が研ぎ澄まされる」などと反応していた。音を絵や言葉でデザインして描いていった。②森の中で目を閉じて歩くと不安であるが、他者との信頼関係や相手に触れる安心感から徐々に歩くことに慣れ、目を瞑っている分、土の音や葉っぱの音が普段以上に感じられたり、土の感触や枝の感触を足の裏や手から感じ取れたりした。感覚を研ぎ澄ませながら、森の中の空間を感じる・匂う・触る・聴く・浸ることができたようである。③ストーリー化、イメージの音を探し、創作では、初めに個々のイメージの音を大切にさせた。それぞれの違う感じ方を尊重し合いながら、グループでの活発な交流に繋がった。森の中での活動で信頼関係を構築したからこそ、お互いの感じ方を大切にできたようであった。それぞれのアイデアを出し合いながら、他者と対話し、徐々にストーリーを創作した。④グループ発表では、それぞれのグループがグループ毎にテーマを掲げ、身近なモノや道具を用いて音を創り、音と身体でテーマを表現することができた。学生からは、「同じ森の中で活動を行ったのに、感じ方や表現がそれぞれ違って面白い」という意見がみられた。

「感じたことを描く」では、①感じたことをフリーで画用紙に表現することにした。ここまでの活動で、感じたことや体験したことを自分自身で自由に表現する活動を行った。絵の具やクレヨンなどを手や筆などを自由を使用して表現していく。あくまでその風景の具体的な姿を描くのでは



図4 他者と森を歩く活動

なく、午前中に行った体験や活動、その空間から感じたことをそのまま自由に描くことを大事にした。午前中の活動を思い出し、会話をしながら作業を進めている学生の身体には柔らかさが見られた。完成に向かう作品の中には、絵の中に匂いや音などの体験したものが、自由に表現できているものも見られた。完成した絵のコメントには「午



図5 活動を想起しながらの表現



図6 森で感じた表現の作品

前中の光を表した」,「この点は音」,「森に落ちていたカラスの羽を一緒に飾ってみた」など、個々の感じたものが、多種多様に自由に描かれていた。

2)「環境・音楽・図工」領域の身体レッスン②

表2 身体レッスン②の概要

実施日	2016年12月16日(金)1限,2限
対象	学部2年生(各時間40人程度,合計80名)
場所	本学のテニスコート付近の森
ねらい	仲間と協働しながら,体験を通して自然を身体で感じ取ることができる。
流れ	環境:「焼き芋づくり」焼き芋の作り方を考える,材料を揃える,焼き芋を味わう。 図工:「フロッタージュ」「近くにある枝や葉をパネルに載せてアート」 音楽:「音の風景と歌」風の音,自然の音,たき火の音(火の勢いに対する音の変化)童謡「たき火」の歌

主に、「焼き芋づくり」を中心に活動を行った。一からの焼き芋づくり(材料調達・火おこしなど

も含む)では,初めて体験する学生もあり,仲間と触れ合い試行錯誤しながらも,協働して焼き芋づくりを進めていく様子が見られた。

火おこしをして,葉が燃えてくると,「火の音」を感じ始め,「パチパチ音がする」など,自然と音に反応し,火の燃えている勢いによって音の鳴り方が違うことなどを体感していた。また,ゆっくり流れていく時間の中で,風の音を聴いたり,自然の音や匂いを感じたりする姿が見られた。焼き芋ができるまでに,フロッタージュ製作や,のり版にアートする活動を取り入れたが,身の回りにある葉や枝を探しながら,グループごとに自然の風景を表現していった。それぞれのグループごとに色々な作品が出来上がった。



図7 焼き芋づくりの協同作業



図9 森のアート製作



図8 フロッタージュの作成



図10 「たき火」の歌唱

6. 総合考察

以上、2回に渡り身体レッスンの授業を試み、その中で6つの実践を試験的に実施した。それら6つの実践が、授業者のねらいとする「しなやかな身体」と「共鳴する身体」の獲得にどのような有効性があったのかを整理したのが図11である。

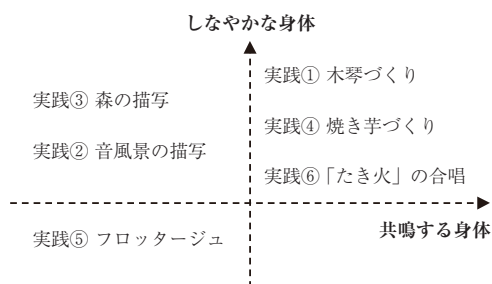


図 11 身体レッスンの有効性

実践⑤フロッタージュは、教材としては有効と考えられたが、学生の技術では難しく、思うような作品が出来上がらず、協同作業にもまとまりが見られなかった。一方で実践①木琴づくりは、木を切り揃える作業や音階を並べる作業に適度な技術が要求され、協同で一つの作品をつくりあげる達成感を体験することができ有効であったと考えられる。これらの結果から、授業実施のフィールドにおいてどのような教材を利用し、協同性を生成することができるのかが重要であるといえる。

多領域横断型の実践は初めての試みではあったが、今回の2つの実践を通して、学科全体でそれぞれの領域を共有できたことやカリキュラムと各科目の実践を関連づけた議論が行えたことは大きい。他領域と共に授業をつくっていくという面白さと共に、領域を超えた授業づくりは、色々な意味で次につながるステップとなった。

7. 今後の課題と展望

本実践のテーマである、「しなやかな身体と共鳴する身体」の獲得のためのアプローチとしては、学生の姿を通して、一歩前進することができた。しかし一方では、こういった取り組みは、学科における様々な実践場面で、継続して育成して

いく必要がある。今回の実践を検証し、さらに様々な視点から活動を考えていくこと、カリキュラムマップと授業の関連付け、その配列や並び、4年間の学びとしての理論・実践・実習、領域・教科・科目の関連等について更に検討を行い、学科として効果的な授業づくりを目指すこと、そして、仲間と共に学びが深まっていく実践を深めていくことが今後の課題である。

引用文献

- 青木恵理子（2013）. 声の汚染 菅原和孝編『身体化の人類学』, 世界思想社, 285-304頁.
- 樋口聡（2005）. 身体教育の思想, 勁草書房, 173頁.
- 平田オリザ（2012）. わかりあえないことから, 講談社現代新書, 134-137頁.
- 市川洋子（2009）. プロジェクトの企画段階における子どもたちの関与の相違がその後の課題解決活動に及ぼす影響, せいかつか&そうごう第16号, 118-125頁.
- 国分一太郎（1973）. しなやかさというたからもの, 晶文社, 10-15頁.
- 倉島哲（2007）. 身体技法と社会学的認識, 世界思想社, 103-136頁.
- 教育科学研究会編（2005）. なぜフィンランドの子どもたちは「学力」が高いのか, 国土社, 39-41頁.
- 宮野純次（2009）. 教員や保育士の養成課程における自然体験学習の意義と授業カリキュラム, 自然体験学習実践研究1巻2号, 51-66頁.
- 小川博久（2013）. 保育者養成論, 萌文書林, 284-286頁.
- 竹内敏晴（1999）. 教師のためのからだことば, ちくま学芸文庫, 65-70頁.
- 地域と連携する大学教育研究会（2012）. 地域に学ぶ, 学生が変わる, 東京学芸大学出版会, 31-60頁.
- 山田陽一（2008）. 音楽する身体, 昭和堂, 250-265頁.
- 安永悟（2009）. 協同による大学授業の改善, 教育心理学48号, 163-172頁.

(2017.9.27 受稿, 2017.10.6 受理)